トーマス・マロリーにみる死の受容

―剣と杯から読み解くアーサー王物語―

福　江　千　帆

序　論

15 世紀末のイングランドにおいて，ある注目するべき作品が著された。サー・トーマス・マロリー (Malory, Sir Thomas [d. 1471])[1] によるアーサー王の物語である。この物語は主人公アーサー (Arthur)[2] の生涯をその主軸に，彼に仕える騎士たちの冒険譚や恋愛物語をその伏線におきながら，その王国の誕生から崩壊までを述べた，アーサー王の伝説の集大成ともいうべき作品である。

そもそもアーサー王の物語はさまざまな時代を超えて，語り継がれてきた伝説である。その起源はいまだに明らかにされてはいないが，アーサー王に関する文献ははるか 6 世紀，550 年にウェイルズの修道僧ギルダス (Gildas [d. 570]) によって著された，『ブリタニアの破滅と征服』(*De Excidio et Conquestu Britanniae*) にまでさかのぼることができるといわれている[3]。その後アーサー王の伝説は，南ウェイルズの修道士ネンニウス (Nennius [fl. c.830]) が 9 世紀に著した『ブリトン人史』(*Historia Britonum*)，1138 年に著された修道士ジョフリ・オブ・モンマス (Monmouth, Geoffrey of [d. 1155]) の『ブリタニア列王史』(*Historia Regum Britanniae*)，そして 12 世紀フランスの詩人クレチアン・ド・トロワ (Troyes, Chréen de [fl. 1170-90]) によるアーサー王の作品群と，しだいにその土台を確立する一方，恋愛物

語や聖杯探求など多くの逸話が挿入されて，膨大な物語群を形成していった。

そのような混沌とした物語群を散文形式で集大成したものが，13 世紀フランスにおいて『流布本物語』(Vulgate cycle) として成立した。マロリーの作品はこの『流布本物語』を基盤に，さらにその他の脚色も交えて書き上げられたものといわれている[4]。彼の作品はその後 1485 年に，イングランドの印刷家ウィリアム・キャクストン (Caxton, William [1422-91]) によって『アーサー王の死』(*Le Morte D'Arthur*) の題名で出版され，それは今日もなお読み継がれている。このようにマロリーの著作は数あるアーサー王作品のなかでも，金字塔ともよべる重要な作品なのだといえる。

なぜこれほどの変遷を経ながら，長い間アーサー王の物語が語り継がれてきたのであろうか。アーサー王の物語は主人公アーサーや彼に忠誠を誓う騎士たちの英雄譚を中心に，貴婦人たちとの恋愛や不思議な冒険を綴った大作である。なかでも文学作品として多くの読者を引きつけてやまないのは，アーサーの数奇な運命と，その周囲に見え隠れする不可思議な力の存在ではないであろうか。

そもそもアーサーは出生時より数奇な運命を背負っている。イングランドの王ユーサー (Uther) の王子として誕生しながら，生まれ落ちると同時に予言者マーリン (Merlyn) の策によって，身分を隠したままある騎士に養育される (1: 10-11)[5]。それゆえ彼が正当な王位継承者であることを示すために，剣の奇跡が起きるのである。誰も引き抜くことの出来なかった聖なる剣を，偶然にもまだ騎士ですらないアーサーが引き抜く話 (1: 13-14) は，アーサー王の伝説においてもっとも有名な逸話のひとつであると思われる。

王となったのちにもアーサーの周囲には，超人的な力が常に存在している。なかでも大きな影響を持つものとしては，予言者マーリンの存在，そして「湖の貴婦人」(the Lady of the Lake) から譲り受けた剣エクスカリバー (Excalibir) (1: 52-53) があげられるであろう。アーサー王はその腰にエクスカリバーを携え，脇にはマーリンを従えながら，国内平定，領土の拡大，そして秩序の形成と，彼の持つ能力を遺憾なく発揮していく。しかし王国

が崩壊への道をたどり，アーサー自身もついに実子モードレッド(Mordred) の凶刃に倒れたとき，マーリンの姿はすでになく，エクスカリバーもまた湖へと返されるのである。

このような物語の主軸となるアーサー自身の人生にくわえ，その重要な伏線であると考えられる聖杯探求の逸話などにも，人知を越えた不可思議な力が色濃く存在している。ではアーサー王の物語はただの夢物語として，あるいは魔法の世界を満喫する娯楽作品として，当時の人々に求められ，現代にまで読み継がれてきたのであろうか。

マロリーの作品が『アーサー王の死』として世にでたとき，発行者である印刷家キャクストンは彼自身による序文のなかに，この作品を出版するにあたって，読者になにを求めるかを明らかにしている。

> [H]umbly beseeching all noble lords and ladies, with all other estates, of what estate or degree they be of, that shall see and read in this said book and work, that they take the good and honest acts in their remembrance, and to follow the same, wherein they shall find many joyous and pleasant histories, and noble and renowned acts of humanity, gentleness, and chivalries.
>
> (1: cxlv-cxlvi)

> 紳士淑女の皆様につつしんでお願い申し上げます。いかなる身分であらせられましょうとも、ぜひこの本をお読みいただき、その立派な行為の数々をご記憶に留めていただけますように。そしてどうぞそれらを見習っていただけますよう、お願い申し上げます。この物語には楽しく喜ばしいお話も多くあれば、慈愛に満ち、寛大、かつ騎士道精神豊かな、気高くそして名声ある行いの数々が語られておりますゆえに。[6]

キャクストンはアーサー王の物語を提示することで，騎士道にもとづいて生きることを再提唱しようとしたのではなかろうか。いいかえれば彼が出版した『アーサー王の死』は，ただの娯楽的読み物ではなく，読者がそこから読みとるべきなにものかを含んだ作品であるといえよう。

本論文ではこのマロリーによるアーサー王の物語をテキストとして取り上げ，なかでも超人的な力の要素としてもっとも物語との関連性が深いと思われる，聖剣と聖杯のふたつのモチーフに着目した。これらのモチーフがもつ象徴性を検討し，そこからこの物語を現代にいたるまで読み継がせている魅力の根底にあるものを読みとることが，その目的である。

第一章　剣の象徴性

剣はそもそも騎士という職業には欠かすことのできない物である。中世社会において，騎士の叙任式に剣が必須であることからも裏付けられる。位階を世襲できる高貴な家出身の者は別として，一般にしかるべき家柄に生まれた男子は，7, 8 歳のころから騎士のもとに弟子入りし，ペイジ (page) やスクワイア (squire) として徒弟修行を積む。長い修行期間を修めてはじめてに，ようやく騎士 (knight) に叙せられるのである[7]。その叙任式において剣が儀式の中心的役割を担っていることは，剣が非常に重要なシンボルであること，すなわち騎士位を象徴しているといえよう。

マロリーのアーサー王の物語においても，剣は同様に重要なものといえる。事実作品中に示される騎士叙任の光景は，10 世紀後半以降のそれと酷似しており[8]，剣と騎士の密なつながりが物語においても保持されていることがわかる。

さて，剣が騎士にとって不可欠なものである以上，騎士物語であるアーサー王の物語には多くの剣が登場することになるが，ここでは以下の 5 つの剣についてとくに注目したい。物語の主人公アーサーが石から引き抜いたもの (1: 13-14)，同じくアーサーが「湖の貴婦人」からもらったもの (1: 52-53)，ある乙女によって騎士ベイリン (Balyn) にもたらされ (1: 63-64)，後の聖杯探求の物語で騎士ガラハッド (Galahad) によって石から引き抜かれたもの (2: 862-63)，ある高貴な乙女[9]とともにガラハッドの前にあらわれるもの (2: 994-95)，聖杯のあるカーボニック城 (the castell of Carbonek) のふたつ

に折れた剣 (2: 1027) である。これらはさらにアーサーがもつものと，聖杯探求をなしとげる騎士ガラハッドがもつもののふたつに大別できる。

これら 5 つの剣を解釈上特別なものとみなす根拠は，その出自と登場目的にある。まず出自面から検討すると，これらの剣はすべて人知を越えた力によってもたらされていることがあげられる。アーサーが石から抜いた剣や，パーシヴァルの姉とともにもたらされる剣，カーボニック城の折れた剣は，キリスト教の教えにもとづく聖なる事物であることが強調されている[10]。

また残りの 2 つの剣に関しても，それぞれ元の持ち主が「湖の貴婦人」や「アヴァロンの偉大な女領主」(the great Lady Lyle of Avilion) という，人とは異なる神聖な存在であることが指摘できる。なぜならばケルト文化において，湖はいわゆる神域としての役目を負っていたと考えられ[11]，またアヴァロンという名称は，ブリトン人にとっての人間界とは異なる楽園世界の名前として登場していることが指摘されており[12]，人間とは異なる存在，とくに不思議な力を操る人間を超越した存在のすむ場所と考えられるからである。

つぎにこれらの剣の登場目的であるが，これは持ち主であるアーサーとガラハッドを，特殊な役目を負うべき人物として指名することにあると思われる。例外として一時的にせよ聖剣を手にしたベイリンがあげられるが，彼の逸話はガラハッドの物語の序章という性質を内包しているため，むしろ彼は剣の持ち主として独立した人物というよりも，ガラハッドの逸話に付随するものとみなすのが妥当であろう。さらにその剣が示す人物が負う役目もまた，ひとつは建国，もうひとつは聖杯探求という，奇跡にみあう大事業なのである。

以上のことから，先にあげた 5 つの剣が物語において特殊な存在であり，他の剣とは一線を画すものであると考えられる。またその根拠そのものが，5 つの剣の共通点でもあることを指摘しておきたい。これらの剣の背後に人知を越えた存在があることによって，剣を入手した人物もまた，他の人々より選別された特別な存在だと考えられる。これらの剣は誰にでも扱

えるものではなく，正当な持ち主のみがその力を振るうことができるからである。

つぎに 5 つ剣の相違点からそれぞれの特徴を導きだし，それぞれの剣の役割を検討していきたい。まずアーサーのものとなる 2 つの剣であるが，これは彼の王国と深い関わりを持っている。

まずアーサーがはじめに入手する剣は，王権の象徴であると思われる。この石に突き刺さった剣は，引き抜くものをイングランドの正統な王位継承者だと証明するためのものであり，この剣を入手することによって，騎士ですらなかったアーサーは王位継承権を得て戴冠する。

'We wille have Arthur unto our kyng ! We weille put hym no more in delay, for we all see that it is Goddes wille that he shalle be our kynge, and who that holdeyh ageynst it, we sille slee hym.' And therwithall they knelyd at ones, both ryche and poure, and cryed Arthur mercy bycause they had delayed hym so longe. And Arthur foryaf hem and took the swerd bitwene both his handes and offred it upon the aulter where the Archebicchop was, and so was he made knyghte of the best man that was there. (1: 16)

「アーサーを我らが王として戴こう！　もはやこれ以上、彼の戴冠をのばすのはやめるのだ。が彼こそが我らの王たることを、神が示したもうたのを、我らは皆しかと見たのだから。誰かこれに異議を述べるものがあれば、そいつを殺してしまえ。」
そして富める者も貧しき者も皆一斉にひざまずき、アーサーにかくも長く彼を待たせたことの許しを請うた。アーサーは彼らを許すと、件の剣を両手で持ち、大司教のいる祭壇へと捧げた。そしてその場に居合わせたもっとも位の高い者の手によって、騎士へと叙せられた。

アーサーはその後もこの剣を身につけてはいるが，実際に剣として使用した場面はたったの一度，彼の戴冠を不服として反逆を企てた者達との戦争場面 (1: 19) においてのみである。これらのことから，この剣は獲得する

ことに重点が置かれたものではないかと考えられる。

この推測はアーサーが戴冠した後しばらくして，剣を折ってしまうことからもみてとれる。この奇跡の剣消失の原因としては，予言者マーリンの忠告をあえて無視して決闘を強行したアーサー自身の軽率な行動，あるいは実姉との契りというキリスト教における罪を彼が犯したことなどにより，彼自身が剣を保持する資格を失ったためとも考えられる。しかしそののちに彼が別の奇跡の剣を入手することを考慮すれば，彼が奇跡の剣を扱う権利を失ったというよりも，この剣が担っていた目的であるアーサーの王権獲得が成就されたことによって，この剣そのものの役割が終わったのだという点がさらに大きな理由として考えられる。

以上のように第 1 の剣が継承すべき王権の象徴であるならば，それに対し 2 番目にアーサーが獲得する剣が象徴するものは彼の王権の存続，つまりアーサーが王位に在り続ける権利だと考えられる。「湖の貴婦人」に与えられてより後，第 2 の剣は彼が死の船出を迎えるまで共に歩むことになるからである。くわえて，この剣がやはり奇跡によって与えられたという背景により，彼が王権を掌握するべき人物であることが保障されていることも指摘しておきたい。

この第 2 の剣と第 1 の剣との最大の違いは，第 2 の剣は固有の名前「エクスカリバー」を持っていることであろう。固有の名を持つことによってその特質が際立ち，くわえて名を持たない他の剣との一線を画す存在であることが暗示されているといえよう。

第 2 の剣がもつもうひとつ特筆すべき付加価値は，その鞘がもつ不死効果である。人間には絶対不可能である死をコントロールしうる能力は，この剣が超人的な力を保有するものであることをより強調するとともに，それを持つアーサーが他の人々を超え，その上に君臨するのにふさわしい特別な存在であることをも示している。

第 2 の剣にこのような能力が付加された理由は，王権を保持するためにアーサーが戦わねばならなかったためだと思われる。戴冠をおえて王となったアーサーは，継承した王国の上に自分自身の王国を作り上げていかね

ばならない。そのために第 2 の剣はアーサー王の絶対的な正当性を保障する一方で，彼が自らの道を切り開くための道具という側面も保有していると考えられる。

「鋼を断つ」ことを意味する「エクスカリバー」を名として冠していることからも，この剣が使われるためのものであると考えられる。当時の武装や武器を考慮すれば，鋼を断ち切る力は計り知れない優位をアーサーに約束するものであったと推察される。エクスカリバーはアーサーに王国支配のためにもたらされた，他を超越する武力なのである。つまり第 2 の剣はアーサーの王たる権利の象徴であると同時に，彼が王であり続けるための力の象徴なのだと考えられる。

では，騎士ガラハッドと関わる 3 つの剣についてはどうか。アーサーの 2 つの剣は物語上，同時に彼のもとには存在していないのに対し，ガラハッドの 3 つの剣は物語のなかで同時期に平行して存在している。このことからアーサーの 2 つの剣にくらべ，ガラハッドに関わる剣はそれぞれの役割がそれほど明確に分離していないのではないかと考えられる。つまりこれら 3 つの剣には相違点よりも，共通点に重点がおかれているのではないかと推測される。

これはガラハッドに登場当初より，聖杯探求という目的が一貫して与えられているためと思われる。聖杯探求は彼自身の人生にあたれられた目的であり，この目的が成し遂げられたとき，彼の魂もまた天へと召されている。ガラハッドはまさしく聖杯探求のための騎士なのである。

ではこれら 3 つの剣によって示される，聖杯の騎士ガラハッドの力とはなにか。それは癒しの力，復元の力であると考えられる。科せられている苦しみを取り除き，あるべき姿あるいはよりよい姿へと戻す力を示すことが，ガラハッドが起こした剣の奇跡に共通する点だからだ。

まずガラハッドが最初に手にする剣には浄化の力を象徴していると考えられる。この剣は前の持ち主ベイリンの元に，呪われた魔剣として登場する。そもそも剣をベイリンへもたらした乙女自身が呪われるべき存在であり (1: 67-68)，剣を手にした彼は関わる者すべてに死や災厄をもたらし，最

後には彼自身も最愛の弟との相打ちという死を迎える (1: 89-91)。しかしこの呪いはガラハッドが手にすることで取り除かれて奇跡の剣となる。またこの剣の呪いを解くのと同時に，それまで誰も座ってはならないとされた円卓の「禁じられた席」(Sege Perelous) (2: 855) がガラハッドを迎えいれる。これは呪われた席の浄化と考えられ，ガラハッドの癒しの力が二重に示されていると考えられる。

このほかにも，聖杯をイングランドにもたらした聖人アリマタヤのヨセフの腿を突いたもの (2: 1027) といわれる，ふたつに折れた剣が登場する。剣が折れるという事象は，剣がその機能を失ったことを示しており，いわば剣の死ともいえる。これはアーサーの第 1 の剣が折れたことにより，物語から姿を消していることからも，裏付けられよう。折れた剣はすなわち死した剣であるが，ガラハッドがこれを一振りの剣に直すという復活の奇跡をおこなう。剣をその死から復活させたガラハッドは，聖杯の使い手としてその直後，長い苦しみにあえいでいた「不具王」(the Maymed Kynge) を解放する。すなわち人間を癒し，救うことが可能な存在となるのである。

しかしガラハッドの剣のうち，もっとも重要なものは「不思議な帯の剣」(the Swerde with the Straunge Gurdyls) だと思われる。高貴な出自の乙女とともに姿を現すその剣は，アーサーのエクスカリバー同様，固有名をもち (2: 995)，最後までガラハッドが携えていたことが明記されている剣だからだ。

この「不思議な帯の剣」がとくに表しているのは，古いものから新しいものへという生まれ変わりの力，新たな生を授ける力だと考えられる。これはこの剣の帯によってあらわされている。この剣は引き抜く際に新しい剣帯を必要とし，さらにその剣帯は処女の手によるものでなければならない (2: 987-88)。この剣はひきぬかれ，帯が新しく付されることによって，剣を引き抜くガラハッドと剣帯を作り出した乙女という一組の男女のもとに，あらたな生を得るのだと考えられる。この剣をとりまく部屋の内装も，アダムとイヴにさかのぼる創世記を暗示するものとなっており (2: 990-94)，新たな誕生という印象を一層強めている。さらにくわえるならば，剣帯を

生み出すのが処女であることから，キリスト生誕につながる救世主の誕生をも暗示されていると考えられる。

このようにガラハッドの 3 つの剣には，浄化，誕生，復活という癒しの力を象徴するという大きな共通点が確認されるのである。またこれらの象徴がすべてイエス・キリストを彷彿とさせるものであることから，この物語における聖杯の騎士ガラハッドの役割とは，救世主のそれであると考えられる。

以上，剣の象徴性について検討したことにより，それぞれがもつ力に差異があることが明らかとなった。アーサーの剣が象徴するのは武力であり，対するガラハッドのそれは回復力である。ふたりは特別に選ばれた騎士でありながら，両者のもつ力の指向性は正反対だ。その原因については，次章で探っていきたい。

第二章　聖杯の象徴性

アーサーとガラハッドが持つ力の差異は，聖杯が原因ではないかと考えられる。ふたりは共に特別に選ばれた立派な騎士であるが，聖杯という観点からそれぞれの立場を検討すると，両者のそれはまったく異なる。アーサーが他の騎士たちと同様，聖杯を追い求める立場にあるのに対し，ガラハッドは最初から聖杯の使い手として，むしろ人を超えた神の範疇に属していると思われるからだ。

この作品における聖杯の存在意義は，罪の認識にあると考えられる。ここでいう罪とはキリスト教によって定められたものであり，その意識が聖杯の登場とともに物語の表面に強く押し出されて，それ以降のアーサー王の物語に大きな影響を与えている。

なかでも極めて大きな影響は，物語の導き手が交代したことだと思われる。アーサーの誕生以前より聖杯探求まで，物語を導いてきたのは予言者マーリンであった。彼が物語の進行において優位にあったことを示してい

ると思われる好例をひとつ挙げよう。第1の剣の逸話において，その舞台の設定や進行の指示をカンタベリーの大司教を通じてマーリンが行っているという点である。

Thenne Merlyn wente to the Archebisshop of Caunterbury and counceilled hym for to sende for all the lordes of the reame and alle the gentilmen of armes, that they shold to London come by Cristmas upon payne of cursynge, and for this cause, that Jesu, that was borne on the nyghte, that He wold of His grete mercy shewe some miracle, as He was come to be Kynge of mankynde, for to shewe somme miracle who shold be rightwys kynge of this reame. So the Archebisshop, by the advys of Merlyn, send for all the lordes and gentilmen of armes that they shold come by Crystmasse even unto London; and many of hem made hem clene of her lyf, that her prayer myghte be the more acceptable unto God. (1: 12)

そこでマーリンはカンタベリーの大司教のもとへ行き、次のように助言した。国内の領主、豪族、騎士たちの全員に、クリスマスまでにロンドンに来るように招集をかけること。さもなければ罰が下るであろう。なぜならその夜お生まれになったイエス様が、その深き御慈愛からある奇跡を見せて下さるからである。人類の王として降臨されたイエス様は、この王国の正当な王位継承者をその奇跡によってお示しになるであろう、と。そこで大司教はこのマーリンの忠告に従って、国内の領主、豪族の全員にクリスマスまでにロンドンへ来るよう、使いを出した。そのためこれを聞いた多くの者たちが、自分の祈りが神へと聞き届けられるようにと、その身を清めたのだった。

予言者とはいえ一介の平民にすぎないはずのマーリンが，本来ならば高い聖職位によって強い発言力をもつはずのカンタベリー大司教を差し置いてキリストの名をとなえ，しかも助言という形ではあれ大司教を従わせるという実は，真にものごとを進める力を持っているのがマーリンであるこ

とを示している。

しかし聖杯の登場によって，物語の導き手は聖杯そのものへと移行していくと考えられる。聖杯の登場を境にマーリンの物語進行に対する影響力はなりをひそめ，騎士たちを導くのは天からの声や，キリスト教の影響力の強い隠者たちとなる。

この物語の導き手の交代は，物語の方向性の転換であると考えられる。なぜならば聖杯は決して，マーリンのあとを継ぐものではなく，新しい価値観を提示しているからである。両者の違いは，その導く目的において明確にあらわれている。

マーリンが物語を導く目的は，アーサーの勝利であり，その王国の勝利であったと思われる。この予言者がアーサーに忠告や助言をおこなうとき，その結果アーサーが得るであろう，あるいは得たであろう利について述べているからである。またアーサーや彼の王国に問題がおきたとき，魔法や剣による力の行使によって彼を守っている。マーリンが示す道はアーサーとその王国の繁栄へ導く為の道であったといえよう。

これに対し，聖杯が導くのは贖罪の道であったと考えられる。聖杯探求の過程によって，登場する騎士たちは各々の罪を認識することになる。善と悪が明確に提示され，騎士の価値は魔法や力の行使から内省へと変化する。

この変化をもっとも如実に語っているのが，騎士ラーンスロット (Launcelot) の立場の変化である。ガラハッドが物語に登場したとたんラーンスロットは，もはやあなたは最高の騎士ではないと告げられる (2: 863)。それまで数々の勝利と栄光を手にし，比類無い騎士として筆頭騎士の地位をほしいままにしていたラーンスロットが，純潔な騎士ガラハッドにその座を譲らねばならなくなったことが，物語の方向性の転換を明確に示している。

そもそもこれほどの影響力をもつ聖杯 (Sankegreall) とはなにか。その由来については，最初に聖杯の物語を著したクレチアン・ド・トロワの頃にさかのぼって，諸説が今もなお提示され続けている。しかしマロリーの作

品においては，聖杯に対する言及がキリスト教に関するものであること (2: 865-66) や，パーシヴァルが聖杯の騎士を務めるクレチアンの作品とは違い，キリスト教と関わりの深いガラハッドが聖杯の騎士として登場していることなどから，キリスト教に基づいた聖杯観が確立されていると考えられる。したがって本稿では，聖杯をキリスト教から生まれたものとして検討する。

キリスト教において，聖杯と呼べるものは 2 種類考えられる。キリストが最後の晩餐で用いたとされる杯と，キリストが磔刑に処せられたときに脇を槍で突かれ，その傷口から流れ出た血を受けたとされる杯である。

聖書における聖杯とは，キリストが最後の晩餐に用いたとする杯[13]のことを指す。キリストの脇を突いたとする話はかろうじて存在するものの[14]彼の血を受けたとする杯そのものはそこには登場していない。したがって，聖杯とはキリストが最後の晩餐で用いた杯とみなす説が妥当と思われる。

しかしマロリーのアーサー王の物語において聖杯を考察する場合，考慮しなければならない重大な点が 1 つある。それはアリマタヤのヨセフの存在である。なぜならばふたつに折れた剣 (2: 1027)，ガラハッドのものとなる十字架の描かれた盾 (2: 879-81)，あるいは聖杯の騎士ガラハッド本人の出自 (2: 859) や，聖杯の奇跡が起きたときに天から降臨した司祭の素性 (2: 1029) など，聖杯探求において重要な意味を持つ人ないし物の背景に，アリマタヤのヨセフの名が登場しているからである。マロリーは作品中に登場する人や物について，それが聖杯探求に関連深いものであることを証明するために，アリマタヤのヨセフの存在を用いていると考えられるのだ。

聖書においてアリマタヤのヨセフがもつ重要な役割とは，キリストの死後にその亡骸を葬ったことにある[15]。つまりアリマタヤのヨセフとはキリストの亡骸，すなわち聖体に触れた人物なのである。

もうひとつ重要だと思われるのは，後年アリマタヤのヨセフがイングランドにわたった (2: 879-80) とされている点である。これはイングランドにつたわる伝説のひとつで，アリマタヤのヨセフはその息子とともに，聖杯を携えてイングランドのグラストンベリーへ来たという逸話に基づいている。さらにこの伝説では，アリマタヤのヨセフがもたらした聖杯には，キ

リストの血と汗が入っていたとされている[16]。このように聖杯に入っていたとされるものが血のみでなかったことや，アリマタヤのヨセフがキリストの磔刑後にその遺体と関わっていることなどから，彼がもたらしたという聖杯は磔刑のキリストを槍で突いた傷口から出た血をうけたものと推測される。

つまりマロリーの作品において，聖杯はアリマタヤのヨセフを基盤においている以上，それが聖書にはみられない伝承であったとしても，キリストの血を受けた杯と見なすべきだと考えられる。聖杯とともに血を流す槍が登場すること (2: 1029) がこれを裏付けている。

しかし，聖杯の最後の晩餐に用いられたという意味も皆無であるとはいいがたい。人々に聖杯の中身をわけあたえるという働きは，むしろこの最後の晩餐で用いられた杯を連想させるからである。つまりマロリーの作品に登場する聖杯は，キリストの血を受けた聖杯でありながら，最後の晩餐でもちいられた聖杯の役割も内包している。いいかえれば聖書の聖杯をもとに発達した伝承の聖杯なのだといえよう。

このような由来をもつ聖杯の大きな特徴は，聖体との結びつきであると思われる。なぜならば奇跡の力を持つのはあくまで聖体であって，聖杯はその入れ物にすぎないからである。聖杯と聖体という組み合わせは，アリマタヤのヨセフから連想させたものと思われる。

物語のなかで聖杯が起こす奇跡は，まさに癒しの奇跡である。人が聖杯の中にある聖体を食することによって，苦痛からの解放や充足がもたらされる。「不具王」の傷は治され (2: 1031)，不当に牢につながれたガラハッドたちも，投獄されているあいだは聖杯によって空腹をみたしている (2: 1033) ことなどが，その好例である。このように聖体すなわち聖杯が癒しの力を持つゆえに，その騎士であり行使者であるガラハッドもまた，癒しの力を持ちうるのである。

しかし作品中に起こる聖杯の奇跡には一度だけ，例外と呼べるものがある。それはガラハッドが最初の剣の奇跡を起こした直後，アーサーの宮廷において，王をはじめ円卓の騎士全員にもたらされるもの (2: 865) で，こ

れは他の聖杯の奇跡とはその目的を異にするものと考えられる。なぜならここで登場する聖杯は癒しではなく，物語を聖杯探求へと導くきっかけという役割をもつからだ。幸福に満ちた奇跡を経験することによって，その至福の時を今一度得るために，騎士らは全員一致で幸福をもたらす聖杯を求めて旅立つ。このときこそが物語の導き手はマーリンから聖杯へと移行する瞬間であり，ゆえにこの聖杯の奇跡は，物語の大転換点と考えられる。

この転換点で起きた奇跡をのぞくと，他の聖杯の奇跡にはある共通点があることに気がつく。それはその奇跡の受け手が非常に限定されていることである。奇跡にたちあう資格がないと見なされた人物は，無情にも意識をなくしたり (2: 1016)，その場から退去を余儀なくされたり (2: 1028-29) する。聖杯の恩恵をうけるためには，極めて狭き門を通らねばならないのである。

この狭き門を通るために必要なのが，自己の罪の認識とその贖罪である。聖杯探求に出た騎士たちは罪の懺悔を行うよう，隠者らによってくりかえし告げられている。このような聖杯探求の過程で，騎士たちは自己の罪の意識を強く感じるようになる。そしてそこに，アリマタヤのヨセフの聖なる家系に生まれ，罪の汚れを一点ももたず，登場した時点から他の騎士たちを超越している騎士ガラハッドが対照的に登場する。

この卓越した純潔性のために，ガラハッドは他の騎士との比較対象の役目も負っていると思われる。他の騎士たちはこのガラハッドと比較されることによって，それぞれが背負う罪の存在をより明確に認識されることになるからである。その好例といえるのが騎士ラーンスロットである。ともに誉れ高い騎士であり，血のつながった親子でありながら，純潔を称えられるガラハッドに，不義という罪を負ったラーンスロットは決して打ち勝つことはできない。

このようなガラハッド像は，キリスト教の騎士の理想を顕現した姿と考えられる。聖杯と人間との狭間にあって両者を取り持つガラハッドは，人間を超越した存在ととらえられるが，その一方で彼の純潔性やそれを保つ態度，それにくわえて神に対し常に敬虔なその姿勢 (2: 986) は，ひとりの

キリスト教信徒としての理想的な姿でもあるからである。

そのような騎士が聖杯探求達成後に天に召されていることは，象徴的なできごとだ。聖なる探求を極めた彼のたどり着く先が天であるということは，探求に参加した他の騎士たちが目指すべきところも天であることを示していると考えられる。ガラハッドの至福に満ちた昇天には，死によるいかなる苦しみもみられない (2: 1035)。聖杯探求の道のりは，天への道のりであり，それはキリスト教信徒としての道である。その道へと騎士たちを導く唯一無二の聖杯は，奇跡を起こし人々に至福をもたらす神の慈愛の象徴であるのと同時に，天へと向かう高邁な精神の象徴であると考えられる。

第三章　マロリーと騎士道

騎士たちの物語を読み解くにあたって忘れてはならないのが，彼らの行動や思考の根底をなす騎士道精神である。この特徴的な思想は，剣や杯など騎士たちに外側から影響を与える事柄に対し，騎士たちを内面から決定づける要素であると考えられるからだ。

マロリーのアーサー王の物語を読むにあたって，騎士道に着目することは妥当なものと思われる。そもそもアーサー王の物語群には，アーサー自身の物語をはじめとする英雄物語と，ランスロットとグィネヴィア (Gwenyver) やトリストラム (Trystram) とイソード (Isode) に代表される恋愛ロマンスという，2 つの大きな柱を内包している。この 2 大柱のうち，マロリーがこの作品を執筆したさいに宮廷における恋愛を本筋からははずし，騎士道という理念ひとつを中心テーマとして据えたといわれており[17]，マロリーがこの作品を著わすにあたって，彼なりの主張するべき騎士道があったものと考えられる。

この章ではアーサー王の物語から，マロリーが理想として描いた騎士道とはどのようなものであるのかを読みとり，さらにその騎士道がなぜ彼の理想とされたのかを検討していきたい。

まず，アーサー王の物語に登場する騎士たちはどのような存在たれと望まれていたのか。これは物語のなかで，聖霊降誕祭にアーサーの側近でもある円卓の騎士たちが立てるべしとされた，次の誓いから推察できると思われる。

[The kinge] charged them never to do outerage nothir mourthir, and allwayes to fle treson, and to gyff mercy unto hym that askith mercy, upon payne of forfiture worship and lordship of kynge Arthure for evermore; and allwayes to do ladyes, damsels, and jantilwomen and wydowes strengthe nem in hir ryghtes, and never to enforce them, upon payne of dethe. Also, that no man take no batayles in a wrongefull quarell for no love ne for no worldis goodis. So unto thys were all knyghtis sworne of the Table Rounde, both olde and younge, and every yere so were the sworne at the hybhe feste of Pentecoste. (1: 120)

王は次のように命じた。決して乱暴をはたらいたり、人を殺さないこと。裏切りに手を染めないこと。情けを請う者には慈悲を与えること。これに反した者はその名誉とアーサー王の庇護を永遠に失うであろう。さらに、当然ながら常に貴婦人、乙女、侍女、そして寡婦たちの力となり、決して彼女たちに無理を強いないこと。これに反する者は死をもって報いられるであろう。またいかなる者も、正当な理由のない争いをしてはならない。そこで円卓の騎士たちは老いた者も若者も全員、この誓いを立てた。そして毎年、聖霊降臨祭の大祝祭ごとにこの誓いを新たにしたのである。

この誓いを要約すると，正当な理由なくして争いをしないこと，背信しないこと，そして力の無いものを守ることの 3 点にまとめることができる。アーサーの宮廷に属する騎士がすべてこの誓いを立てかつ毎年それを新たにしたと本文にあることから，アーサーの騎士たちにとってこの 3 点はとくに重んじられるべきものと思われる。

物語が展開していくなかで，アーサーの騎士たちがとる行動にはたびた

びこの 3 つの基本理念の影響と思われるものがある。アーサーや騎士たちがその剣を抜いて戦うのは，その火種がもちこまれたりあるいは何者かに助けを求められたりと，その理由が明確に示された後であり，しかもその多くは守るべき弱者である乙女や貴婦人の求めによるものである。

このアーサーの騎士たちが立てる誓いからは，2 つの重要な点が考えられる。ひとつは騎士たちの無私無欲さ，もうひとつは忠誠心の劣後性である。

ひとつめの無私無欲さについては，文面から直接読みとることができる。この物語に登場する立派な騎士というものは，私利私欲のために彼らのもてる力を行使してはならないのであり，かつその一方で弱き者に助けを請われれば，それがどれほど無謀に思われたとしても，その願いをかなえるために討ってでなければならない。

この傾向はトリストラムの物語のなかで，騎士ディナダン (Dynadan) がトリストラムに投げかける，次のようなセリフのなかに如実にあらわされている。

> Than sir Trystramys laced on sir Dynadans helme and prayed hym to helpe hym.
>
> 'I woll nat,' seyde sir Dynadan, 'for I am sore wounded of thirty knyghtes that we had ado withal. But ye fare,' seyde sir Dynadan, 'as a man were oute of hys mynde that wold caste hymselff away. And I may curse the tyme that ever I sye you, for in all the worlde ar nat such two knyghtes that ar so wood as ys sir Launcelot and ye, sir Trystram !['] (2: 507-08)

そこでトリストラムはディナダンの兜の紐を締めてやると、助力してくれるように頼んだ。「私はしませんよ。」とディナダンは言った。「なぜといって、さきほどの 30 人の騎士たちとの戦いのせいで、ひどい怪我をしているのですから。しかしあなたは」と、ディナダンは続けた。「気が狂っているがために命を捨てるかのようなことをする人だ。私はあなたと出会ったことを呪います。この世界でそんな向こう見ずな騎士は二人しか知りませんね。ラーンスロット

卿とあなたですよ、トリストラム卿！」

この場面は物語のなかでも，立派な騎士とそうではない騎士との違いが明確に対比された好例である。

このようにこれら立派な騎士たちは力を振るう場に臨むにあたって，己の利潤にはしばられないものとして描かれている。ときには利潤だけではなく，自らの命さえも懸けることを厭わない。結果として彼らは戦いの後に，地位や領地，そして美しい乙女などの戦利品を得ることになることがしばしばであるが，それはあくまで結果であって，彼らはそれを目的に力を振るうわけではない。彼らが唯一望んだものがあるとすれば，それは名誉という精神的充足である。

ふたつめの点である忠誠心の劣後性は，逆に宣誓にないことから推察される。ここで述べたいのは，彼らが王であり主君であるアーサーを軽んじているということではなく，騎士たちが守る理念の優先順位において，忠誠心が最上位を占めていない，あるいは物語のなかで表だってアーサーへの忠誠ということが推奨されていない，と思われる点である。

円卓の騎士たちは叙任されるにあたって，全員が王であるアーサーに忠誠を誓っている。戦時には彼の味方として力を振るい，人に尋ねられれば誇りを持ってアーサー王の宮廷の者であると答える。しかしそれでも時として彼らはアーサーの意志や王国の繁栄よりも，自己信念をより優先させる。

その好例といえるのが騎士ベイリンである。彼は不思議な力を持つ剣のとりことなり，アーサーをはじめとする周囲の反対を押し切って旅に出て，その結果自身と弟ベイラン (Balan) の死という悲劇を迎えてしまう。しかし物語のなかでベイランは兄に，神に課された冒険をするべきだと語りかけている。これはベイリンがとった行動を肯定するものであり，後にベイリン自身によって命を奪われるベイランの口によるものであることを考慮すると，許しの意味も内包する言葉だと思われる。この部分はマロリーが独自に挿入した部分であり[18]，そのことからもマロリーはベイリンの生き方は

騎士としてあるべき生き方とみなしていると思われる。

しかし一般的には，騎士道において主君への忠誠は最重要項目であろう。そもそも騎士制度はその成立において，領主と戦士とのあいだに結ばれた契約が根本にあり，またこの制度の成立においてキリスト教の教会の影響力が著しいものであった[19]。これらのことから，領主への忠誠や教会を守るという使命は，騎士にとって欠いてはならない要素であると考えられる。

しかし実際にマロリーが執筆した 15 世紀には，すでに騎士制度は衰退期に入っており，騎士道の内包する意味も大きく変わっていたと考えられている。その理由には諸説があるが，時代が進むに従って，これら騎士道として重んじられた信念に偏りが生じてきたためと思われる。教会は独自の目的のために騎士団をかかえるようになり[20]，立派か否かではなく，主君にとって都合のいい騎士が幅をきかせるようになる[21]。活躍の場も戦場からしだいに宮廷内の競技場へと移っていき，競技自体も，模擬戦というよりも見せ物の意味合いが強くなってくる[22]。とくに薔薇戦争などの内紛によって，貴族たちが長期にわたって不安定な社会情勢にさらされていたことを考えれば，友愛精神よりも保身を優先する者が多く現れたのではないかと思われる。

以上のことを考慮すると，マロリーの作品が最盛期のころの騎士道を模範としていることと，そこに必要以上の忠誠にもとづく王や教会への依存がみられないことは，当時の衰退しつつあった騎士道への反発ではないかと考えられる。イギリスのアーサー王伝説の研究者リチャード・バーバー (Barber, Richard [1941-]) はマロリーがこの作品を著わしたことについて，次のように述べている。

> Malory's greatest achievement is to give us a last glimpse of the high purpose that chivalry could provide, using romantic material and writing in days when the ideas of knighthood had given way to the pomp and circumstance of ceremonial.[23]

マロリーのもっとも大きな業績は、騎士道の観念がものものしい儀式にとって替わられた時代に、ロマンスの題材を使い、そしてそれを書くことで、騎士道が供することのできる気高い目標の最後のきらめきを描いてみせたことである。

たしかにマロリーが咲かせたのは，騎士道の最後の一花であったのかもしれない。しかし不安定なイングランドの社会と，そのなかで衰退しつつある騎士制度，さらに変化しつつある騎士の存在意義を目の当たりにした彼が，過去に華咲いた騎士道の精神を未来にいかし，伝えていくひとつの方法を，物語に登場する騎士たちの生き様に託して提示したのではないだろうか。騎士という生き方を国の制度として維持することが不可能となった社会のなかで，個人の信念という形で騎士道の精神を受け継がせていく方法を，マロリーはみいだしたのだと思われる。

第四章　アーサー王の死にみる受容精神

アーサー王の物語に登場する騎士たちの生き方が，もっとも顕著に表われるのは彼らが死す時だと思われる。現世を剣と共に力をもって切り開いた先，慰安に満ちた天上世界へ至る点が，昇天すなわち人間の死であり，それまでの行き方の是非を問われる時点である。主人公アーサーをはじめとする騎士の死も，それぞれに課された試練や冒険の果てにある。彼らはそこで，自身が選んだ騎士という職業にふさわしく生きてきたかを問われるのである。

騎士としてふさわしい生き方や姿勢とは，どのようなことをさすのか。アーサーの騎士たちが理想としている姿勢について，イギリスのテレンス・マッカーシー (McCarthy, Terence) は，その著書 *An Introduction to Malory* のなかで，次のようにまとめている。

Knights are devoted to adventure, to seeking the events that fortune will

bring. They put themselves at the mercy of chance: their lives are dedicated to risk not prudent domesticity, for their readiness to face the unknown means flaunting prudence. Their devotion to action is so total that they appear at times willful and unreasonable. Naive too, since a knight gives himself wholeheartedly and instantly to the cause.[24]

騎士たちは冒険に、そして運命がもたらすであろうできごとを探すことにその身を捧げる。運命の恩恵に自らを委ねているのである。彼らの命は慎ましい家庭生活などではなく、危険にこそ捧げられている。なぜなら未知へと立ち向かう用意をすることは、必然的に慎重さを侮ることになるからである。行動を起こすことへの徹底した専心ぶりのために、彼らは時折わがままで無分別にすらみえる。これは純真であるともいえる。なぜなら騎士というものは全身全霊で即座に、その身を大義のために投げ出すものだからである。

騎士とは課される試練に即座に応えるべき存在であり，またそのために日頃常に準備をしておくべきものとみなされており，事実，多くの登場騎士たちによってこれが実践されている。

このような「立派な」騎士たちの生き方には，現代にはあまりみられない大きな特徴があると思われる。それは死への恐怖心の克服である。前章でも述べたように，彼らは課せられた試練と相対したとき，己の利害を顧みることなく成すべきことに力を尽くす。このとき賭けるものがたとえ己の命であろうとも，彼らはけっして躊躇しない。

しかし忘れてはならないのは，ここで描かれている騎士の生き方が，忠義のために死を奨励したり，そのような死を美徳としたりする，体制側の視点のものではないことである。この物語において評価されることは，試練に立ち向かう勇敢さであって，なにかのために死すことが美化されているわけではない。これはマロリーが各エピソードの発端原因を簡略化している点にも表われていると思われる。なにかのために死すことを美徳として描くのであれば，その理由の部分が省略されてしまっては本末転倒となるからである。

ここで描かれているのはむしろ，死の恐怖を乗り越えることから得られる，生の輝きではないかと考えられる。それは死を恐れるのでも求めるのでもなく，その恐怖による枷をはずすことによって，より充実した騎士としての生を手に入れるというものである。死はたしかに悲劇ではあるけれども，これを受けいれることでアーサーやその騎士たちは最後まで己の意志を貫き，自らの生をその意志の支配下に置くことができたと思われる。

自らの死を受容するという発想は，この物語が著された当時の中世社会においては，現代社会に比べてより身近な発想だったのではないかと考えられる。中世盛期から後期においてヨーロッパ社会では，死の時を審判の時と見なす死生観の変化に加え，戦乱やペストなどによって，人々の生の不安や死の恐怖が強まった[25]。しかし死の歴史について多くの論文を残しているフランスの歴史学者，フィリップ・アリエス (Ariès, Philippe [1914-84]) によれば，それ以前の中世盛期までの社会における死は，人々にとってごく自然に受けいれられた「飼い慣らされた死」であった[26]。マロリーが生きた 15 世紀は既に中世末期であったけれども，この「飼い慣らされた死」を人々の中に思い起こさせるだけの素地が，まだ社会に残っていた可能性は充分に考えられる。

死は人生の 1 時点にすぎないという認識は，ほかでもないガラハッドの聖杯探求においてみられる。癒しの力を持つ聖杯とその騎士ガラハッドが，最後にそろって至福の昇天することによって，恐怖のない死があることを証明していると考えられる。いまや天には真の癒しである聖杯があり，自らを律して立派な騎士として生き抜いた者には，死後にそこへ至る道が開かれることをガラハッドが示しているのだ。

これまで検討してきた死をめぐる思想の数々は，物語の最終部分である主人公アーサー自身の死において，みごとに集約，体現されていると思われる。

まず死へと向かうアーサーの姿には，これまでに取りあげてきた騎士としての姿勢があらわされている。アーサーは物語の前半にマーリンによって，モードレッドが彼の命を奪うであろうことを予言されてもいる (1: 44)。

終盤，実子モードレッドの裏切りに寄って，両者は殺しあわねばならなくなる。アーサーは不運を嘆きながらも，自分の正しいと思う道として，ためらうことなく息子と戦うことを選択するのである (3: 1235)。自らの死を予見しながら，親子の情に引きずられることもなく，与えられた試練に臨んだアーサーの姿は，まさにマロリーの描く騎士の理想そのままであると思われる。さらにくわえるならば，アーサーはモードレッドを討ち果たし，課せられた試練を完了させているのである。

またアーサーに致命傷を与えたのが，自らの近親相姦の罪によって生まれたモードレッドであったということも，注目すべき点である。それは因果応報による罰であると同時に，自らの犯した罪をその命によって贖うものと考えられる。アーサーの犯した最大の罪はここで清められたのだ。その後死を前にしたアーサーは，常人では踏み込むことのできないアヴァロンという楽園へと向かうことになるが，これは罪を許されて天国へと入ることに類似している。

さらに，死と相対しているアーサーからは，それまでふるってきた他を超越する力，エクスかリバーもまた取り除かれる。このエクスカリバーの消失は，アーサーの王国の崩壊をあらわすとともに，アーサーの現世における力の放棄を暗示していると考えられる。ここで気をつけねばならないのは，このたぐいまれな力は，アーサー自身の意志によって放棄されたという点である。つまりアーサーがその力を保持する資格を失ったのではなく，現世での役目を終えた彼が力をもはや必要なとしなくなったためと考えられる。

最後の試練を完遂し，罪の浄化と，力からの解放を得たアーサーは，次の段階へと入る。彼の死がアヴァロンへの船出によって表現されていることが，それを暗示していると考えられる。

このようなアーサーの死は，理想的な死の集大成だと思われる。苦しみはなりをひそめ，死にゆく彼はその最後の瞬間まで，自分自身をその意志によって律している。このような死に様は，騎士ガラハッドもまた聖杯探求の終わりに，聖体拝受の儀式を経て昇天していることにも通じる。物語

のなかで聖剣を保持する 2 大騎士が，同種の迎え方でその死と相対していることによって，恐れる必要のない死の存在がより強く描き出されているのだ。

マロリーはこの物語を世に著すことによって，死の恐怖に翻弄されることなく生きる道を提示しようとしたのではないだろうか。なぜならば当時，死は人間にとって大きな脅威だったと思われるからだ。

死に対する人々の感情を親しみから恐怖へと煽り立てたのは，そこに内包される誤りという観念ではないかと思われる。自らの誤った選択によって死がもたらされた，という発想である。それは罰としての死であり，当時広く浸透しつつあったキリスト教の最後の審判による罪と罰という発想に強く結びついているものと考えられる。

このような罰の死は明らかに，これまでに検討してきたアーサーたちの死とは異なる。なぜなら彼らの死は，天から与えられた道を歩んだ果てにあるものであり，正しい道の先で得たものであって，神からの罰などではあり得ないからである。アーサー王の物語で改めて提示されているのは，罰ではない死の存在だと思われる。

罰の死や破滅という発想，そしてそこに起こる恐怖心は，そもそも審判の名のもとに自らの死を他者の手に委ねた結果生じたものと考えられる。アリエスの説において，当初は死にゆく者自身の手に握られていた臨終の際の主導権が，歴史を経るにつれて親族者の手や医療の手へと移行しており，それにしたがって人と死との間が疎遠になっていくという点が指摘されている[27]。人は未知のものや，馴染みのないものには抵抗を感じるものであろう。人が自らの死を神という他の手に渡したことで，そこには恐怖感が生じる下地がひかれたのではないかと思われる。

事実，このアーサー王の物語においても，死が処刑というかたちで脅迫としてしばしば用いられている。

‘[...]And if I may gete sir Launcelot, wyte you well he shall have as shamefull a dethe.’ (3: 1175)

「そしてラーンスロットを捉えたが最後、いいか、彼にもまた恥ずべき死を与えてくれるわ。」

その一方で，騎士が生よりも進んでみずからの死を望む場面も少なからず見受けられる。ことにアーサーが述べるこのセリフは，非常に興味深いものと思われる。

'As for that,' seyde kynge Arthure, 'dethe ys wellcom to me whan hit commyth. But to yelde me unto the I woll nat!' (1: 50-51)

「そのことなら、」とアーサー王は言った。「死が迎えに来るというのならば、いつでも覚悟は出来ている。しかしそなたに屈するなど決してせんぞ！」

ここに物語における望ましい死と望まざる死の違いが明確化されているといえよう。両者の違い，それは死に向かう者の意志の有無だと考えられる。罪を犯した者に与えられる恥辱としての死が処刑であるが，なぜ処刑が恥辱となりうるかと考えれば，それは罪人として死ぬからではなく，罪人であるゆえに自らの生を取りあげられるからである。死がそれに臨む者の意志に反するとき，それは恐怖として顕現する。逆に自ら選んだ道の果てにあらわれる死は，それをのぞむ者にとって恐るべきものではないのである。

死に対する意志の有無は，アーサーの騎士たちにとって非常に重要なことであったと思われる。それは物語の最終章における騎士ガーウェインの言動に明確に表われている。ガーウェインは血を分けた弟を 3 人と息子を 2 人，ラーンスロットの手によって殺されることになるが，その弟たちの死に対するガーウェインの態度は両極端である。弟の一人アグラヴェイン (Aggravayne) や，息子のフローレンス (Florens) とラヴェル (Lovell) が殺されたとき，ガーウェインが味方し同情したのは加害者であるラーンスロット

であったのに対し，残りのふたりガレス (Gareth) とガヘリス (Gaherys) が同者によって殺されたときには，王国を崩壊させるほどの執念をもってラーンスロットに復讐を誓ったのである。

アグラヴェインや息子たち 2 人が死を迎えたのは，彼らがガーウェインの制止をふりきってまで我を通した，その結果としてであった。だからこそ，ガーウェインも弟を殺されたのになぜ怒らないのか，と聞くアーサーに対して次のように答えているのである。

> 'My lorde,' seyde sir Gawayne, 'of all thys I have a knowleche, which of her dethis sore repentis me. But insomuch as I gaff hem warnynge and tolde my brothir and my sonnes aforehonde what wolde falle on the ende, and insomuche as they wolde nat do be my counceyle, I woll nat meddyll me thereof, nor revenge me nothynge of their dethys[.']　(3: 1176)

> 「陛下、」とガーウェインは言った。「そのことについては私もすべてを存じ上げておりますし、彼らの死は非常に残念に思っております。しかし私は前もって彼らに警告し、彼らがどんな目に陥るか話しておいたのです。それでもなお、彼らは私の忠告に従わなかったのですから、私はそれについて口を出したり、彼らが死んだからといって復讐をしようとは思いません。」

しかしこれに対し，そののちに殺されたガレスとガヘリスの場合は逆である。彼らは丸腰であったにもかかわらず，争いに巻き込まれているうちに，不運にもラーンスロットの剣にかかってしまったのである (3: 1177-78)。このような彼らの死は彼ら自身が望んだものでも意志に従うものでもなく，むしろそれに反するものである。なぜならば彼らは武装をしなかったことによって，予期されていたラーンスロットとの戦いを放棄していることを示していたからである。すなわち彼らに与えられた死は，まったく望まれないのものであったと考えられる。それゆえにガーウェインはすさまじいほどの執念で，旧知の親友であったラーンスロットを追い続けたのである。

つまりアーサー王の物語はその限られた人生を，自らの意志で生き抜い

た騎士たちの物語だと考えられる。彼らが示している人間が進むべき道は，たとえ死の恐怖であろうと自らの意志以外のものによって翻弄されることなく，限られた時間と力の枠のなかで剣を取って自らの思う道を生き抜くことであり，聖杯によって導かれる道において己にふさわしく生きているかぎり，その先にある死は恐れるに足りないものとなる。そして人間は恐れるに足りない存在を受容することができる。死を受容することで，その恐怖に縛られていた生を解放することができるのである。恐怖からの解放は，正しい道を歩むものへの天からの褒章なのだ。

自身の意志で正しい道を歩む。これこそがマロリーがアーサー王の物語を通して提唱した生き方ではないだろうか。自らの死から目を背けずに人生を突き進んだアーサーの騎士たちの姿は，人間の生にきらめきを灯す，ひとつの道標となる可能性を秘めている。

註

1)　各作家の生没年などについては、*The Oxford Companion to English Literature,* 5ed. (ed. Margaret Drabble. Oxford UP., 1985.) を参照した。

2)　本稿で用いる登場人物名及び地名の訳については、中島邦男 他 編『完訳 アーサー王物語』全２巻（青山社, 1995年.）に従った。

3)　青山吉信『アーサー伝説 —歴史とロマンスの交錯—』岩波書店, 1985年, 5-7頁.

4)　Richard Barber, *King Arthur in Legend and History,* London: Cardinal, 1973, p.125.

5)　アーサー王物語の引用テキストとして、本稿では次の書を使用した。*The Works of Sir Thomas Malory,* ed. Eugène Vinaver. 2nd ed. 3 vols. Oxford: Oxford UP., 1967. なお、以後同文献から引用する場合は、書名を省略し、その該当巻数とページ数のみを括弧内に記すものとする。

6)　本稿の引用文における日本語訳はすべて拙訳によるが、人名、地名などの固有名詞に限っては、中島邦男 他 編『完訳　アーサー王物語』全２巻（青山社, 1995 年.）の訳語に従った。

7)　Ewart Oakeshott, *A Knight and his Castle.* 2nd ed. Pennsylvania: Dufour Editons,

1997, pp.42-43.

8) 四宮 満『滅びのシンフォニー トマス・マロリーの世界』法政大学出版局, 1998年, 107頁.

9) この乙女はアーサー王宮の騎士であり、別のアーサー王物語群においては聖杯の騎士とされているパーシヴァル（Percivale）の姉とされている（2: 994-95）。

10) これらの剣はそれぞれ、聖なる日に教会に突如として現れたこと（1: 12）や、キリスト教を象徴するモチーフで飾られた船という安置場所（2: 984-94）、そして聖人アリマタヤのヨセフ（Joseph of Aramathy）を突いたとする逸話（2: 1027）などの、特殊な背景を持っている。

11) ゲルハルト・ヘルム『ケルト人』 関 楠生 訳, 河出書房, 1979 年, 279 頁.

12) ヤン・ブレキリアン『ケルト神話の世界』田中仁彦, 山邑久仁子 訳, 中央公論社, 1998年, 54 頁.

13) Matt. 26.27, Mark 14.23, Luke 22.17, 1 Cor. 11.25.

14) John. 19.34.

15) Matt. 27.57-60, Mark 15.42-46, Luke 23.50-53, John 19.38-41.

16) Richard Barber, ed. and introd. *Myths & Legends of the British Isles*, Woodbridge: The Boydell P., 1999, p.380.

17) Terence McCarthy, *An Introduction to Malory*, Arthurian Studies Ser. 20. Woodbridge: D.S. Brewer, 1988, p.49.

18) Jill Mann, 'Taking the Adventure: Malory and *the Suite du Merlin*,' *Aspects of Malory*. Ed. Toshiyuki Takamiya, and Derek Brewer. Arthurian Studies Ser. 1. Woodgridge: D. S. Brewer, 1981, pp.71-91, p.81.

19) フィリップ・デュ・ピュイ・ド・クランシャン『騎士道』川村克己 新倉俊一 訳, 白水社, 1963年, 17-23頁.

20) Lloyd Lang, and Jennifer Lang, *Mediaval Britain: The Age of Chivalry*, New York: St. Martin's P., 1996, pp.100-01.

21) クランシャン『騎士道』既掲書, 90頁.

22) Richard Barber, *The Knight and Chivalry*, Woodbridge: The Boydell P., 1970,

p.312.

23) Ibid., p.314.

24) Terence McCarthy, *An Introduction to Malory*, op. cit., p.10.

25) 早川良弥「死者への記憶と追悼」『西洋中世史研究入門』佐藤彰一, 池上俊一, 高山 博 編　名古屋大学出版会, 2000年, 73頁.

26) フィリップ・アリエス『死と歴史　西欧中世から現代へ』伊藤 晃, 成瀬駒男 訳, みすず書房, 1983年, 16-32頁.

27) 前掲書, 208-10頁.

なお、本稿は 2002 年度修士課程の学位論文として、提出したものをもとに加筆修正したものである。

引用文献

Barber, Richard. *King Arthur in Legend and History*. London: Cardinal, 1973.

———, ed. and introd. *Myths & Legends of the British Isles*. Woodbridge: The Boydell P., 1999.

———, *The Knight and Chivalry*. Woodbridge: The Boydell P., 1970.

Drabble, Margaret. ed. *The Oxford Companion to English Literature* 5 ed. Oxford: Oxford up., 1985.

Lang, Lloyd, and Jennifer Lang. *Mediaval Britain: The Age of Chivalry*. New York: St. Martin's P., 1996.

Mann, Jill. 'Taking the Adventure: Malory and *the Suite du Merlin*.' *Aspects of Malory*. Ed. Toshiyuki Takamiya, and Derek Brewer. Arthurian Studies Ser. 1. Woodgridge: D. S. Brewer, 1981. 71-91.

McCarthy, Terence. *An Introduction to Malory*. Arthurian Studies Ser. 20. Woodbridge: D.S. Brewer, 1988.

Oakeshott, Ewart. *A Knight and his Castle*. 2nd ed. Pennsylvania: Dufour Editons, 1997.

Vinaver, Eugène. ed. *The Works of Sir Thomas Malory*. 2nd ed. 3 vols. Oxford: Oxford UP., 1967.

青山吉信『アーサー伝説 ― 歴史とロマンスの交錯 ―』岩波書店，1985 年.
フィリップ・アリエス『死と歴史　西欧中世から現代へ』伊藤 晃，成瀬駒男 訳，みすず書房，1983年.
フィリップ・デュ・ピュイド・クランシャン『騎士道』川村克己，新倉俊一 訳，白水社，1963 年.
四宮 満『滅びのシンフォニー　トマス・マロリーの世界』法政大学出版局，1998 年.
早川良弥「死者への記憶と追悼」『西洋中世史研究入門』佐藤彰一，池上俊一，高山 博 編　名古屋大学出版会，2000 年.
ゲルハルト・ヘルム『ケルト人』関 楠生 訳，河出書房，1979 年.
ヤン・ブレキリアン『ケルト神話の世界』田中仁彦，山邑久仁子 訳，中央公論社，1998 年.

参照文献

Field, P.J.C. *The Life and Time of Sir Thomas Malory.* Arthurian Studies Ser. 29. Woodbridge: D. S. Brewer, 1993.

Kim, Hyonjin. *The Knight without the Sword: A Social Landscape of Malorian Chivalry.* Arthurian Studies Ser. 45. Woodbridge: D.S. Brewer, 2000.

Milis, Ludo J. R. ed. *The Pagan Middle Ages.* Trans. Tanis Guest. Woodbridge: The Boydell P, 1998.

———, *Angelic Monks and Earthly Men: Monasticism and its Meaning to Medieval Society.* Woodbridge: The Boydell P., 1992.

Monmouth, Geoffrey of. *The History of the Kings of Britain.* Trans. and introd. Lewis Thorpe. London: Penguin Group, 1966.

Nennius. *The History of the Britons.* Trans. J. A. Giles. California: British American Books, 1986.

Oakeshott, Ewart. *A Knight and his Weapons.* 2nd ed. Pennsylvania: Dufour Editons, 1997.

———, *The Sword in the Age of Chivalry.* Woodbridge: The Boydell P., 1997.

阿部謹也『西洋中世の罪と罰　亡霊の社会史』弘文堂，1989 年.
四宮 満『アーサー王の死　トマス・マロリーの作品構造と文体』法政大学出版局，

1991年.
アーロン・グレーヴィチ『中世文化のカテゴリー』川端香男里，栗原成郎 訳，岩波書店，1999 年.
中島邦男，小川睦子，遠藤幸子 編『完訳　アーサー王物語』全 2 巻，青山社，1995 年.